

---

# サンタクロースのを見つけ方。

秋色\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サンタクロースの見つけ方。

### 【Nコード】

N6571Z

### 【作者名】

秋色\*

### 【あらすじ】

12/23

明日はクリスマスイブ。いつも以上に、街は浮き足立っていた。二人の少女は年の瀬、サンタクロースを見つける。

／ 1 / (前書き)

またまた、青春臭いものを書いてしまいました。

お目汚しですが、時間があるならばどうぞ。感想、お待ちしております。  
ます。

町の総人口に比例しているかのような人通り。散歩がてら立ち寄った商店街の入り口で、私は何気なく立ち止まった。三太も、私の歩みが止まったのを見て、その場で静止して座り込む。東京の渋谷あたりにある犬の像のように、毅然と……しているわけではなく、口からは涎をたらし、はあはあと、荒い息遣いを繰り返している。

このバカ犬……。

大体、こいつは思慮が欠けている。主人が落ち込んでいる時ぐらい、励ます努力をしてほしいものだ。……なんて、犬にそんなことを期待するのが間違っているのだが。

吐いた息が、白くなって霧散する。左の手首に、三太の首から伸びるリードを巻きつけたまま、両手をこすり合わせた。見上げれば、空を覆いつくすは、ねずみ色をした巨大な雲。曇天は、昼過ぎであるはずの時間を、さながら夜に変えているかのようだ。晴れる気配は一向に無く、暗くなり、寒くなるばかり。

手袋、してくればよかったなあ。

部屋でぼーっとしてるよりはましかと外へ出たものの、やはり家でおとなしくしている方が良かった。すでにコタツに適應してしまった私の身体は、冬の気候を拒絶する。

なんて、何を考えても、寒いものは寒い。元々、そんなに大きくはない体を、これでもか、というくらい縮こまらせ、手繰り寄せるように、お気に入りのニット帽を深くかぶった。ついでに、マフラ

ーを鼻の辺りまで押し上げる。隣にいる三太の呼吸は、まだ耳障りな音を上げている。目を向けると、鼻水をたらしていた。犬だって、寒い時は寒いらしい。

ずずつ、と。乙女らしからぬ鼻水すすりをすると、私は再度歩き出した。この商店街は、海岸まで続く。よって、海風が進行方向から流れてきて、その寒さは、スカートには非常にこたえる。周囲にいる街民は、私ほど寒さを感じているわけではないらしい。元氣よく大声で話し、背中を叩き合い。

よくもまあ、こんな日に外へ出て、なおかつそんなことまで。私なら、コタツに入ってみかんを剥いているところだよ？ まったく今日は、例外なだけ。でなければ、本来は電車に乗る距離を歩いたりなどしない。それもヒールで。

雑貨屋さんを横切ると、店先の大きな木が鈴やらりボンやらを身にまとい、普段とはどこか違う、煌びやかな木が目に映る。しかも、おめかしをした気はそれ一本ではなく、商店街にいたるどの店先にも存在した。

なんだ、これ。

見慣れたはずの街も、通り行く人々も、今日はどこか浮かれている感じがする。

ただ一人、浮かれていないのは私だ。普段は、大好き、ってほどではないにしろ、そこそこ愛着を持つ商店街も、今日ばかりは馴染めない。いつもどおりなら、顔を覗かせるお店にも、入る気が起らない。すれ違う人たちから、私は見えていないようにも思う。この、お祭りムード的な雰囲気馴染めない私は、さながら透明人間

になった気分だ。

「ワンツ」

そんな私の心情を察したのか、三太が吠えた。近くにいた若い男性の肩が、びくつ、と揺れたが、一瞥することも無く、素通りしていった。私は、聞きなれた音だから、特に驚くようなことは無かったのだけど、やはり知らない人からすれば、大きな犬がそれなりの声をあげたら怖いはずだ。周りに三太を恐れたちびっ子はいないか確認をする。視界には、私より幼い感じの子どもは見当たらない。ほっ、と胸をなでおろした。一度、マジ泣きされたことがあるから、少し過敏になっているらしい。

「ワンツ」

再び吠えた。なに？ と、目を横にずらし、非難を投げかけるが、悲しいかな。犬には伝わらない。じっ、と私を見る目に負け、屈んで頭をなでてやる。冷え切って、氷のようになった手に、ふさふさの三太の毛皮は、心地がよかった。

「どーしたのよ、三太」

尻尾をせわしなく振り、はっはっはつと、荒い息遣いをしている三太は、見ていてあきない。愛嬌のある人相をしている。いや。犬だから犬相？ まあいいや。

「もしかして、慰めてくれてるの？」

三太は答えない。尻尾も止めない。息遣いなんでもっての他。口元からは涎が……いや、これはさっき言ったな。

「事情も知らないくせに」

最後に軽く三太の頭を叩いて、よっこいしょと、立ち上がった。その声が、あまりにもおばさん臭くて、苦笑してしまう。

「あーあ、」

何やってんだろ、私。ジョシコーサーなんだよ。青春真っ只中なんだよ。よっこいしょ、だなんて……。

落ちてしまったマフラーを、再び鼻にかける。急に暖かくなったせいか、鼻水はスムーズに奥へと引っ込んだ。三太を引っ張りながら、街の徘徊を再開する。

にしても、やっぱりどこがおかしい。浮き浮きとした態度を、全身で示すように、みんな歩いている。なぜだ？

しばらく歩いていると、案外、その答えは簡単に判明した。

花屋さんの店先に置かれたボードに、でかでかと書かれている。

？クリスマスセール実施中。恋人などのプレゼントにどうぞ 花屋の島崎？

ああ、そうか。明日はクリスマスイブだった。

一年に一度、サンタクロースという赤い服を着たじいさんが、こ

れでもかというくらいに、世界中の純粹無垢な子どもたちに、プレゼントを無料配布する日……の、前日。

世間では、クリスマスよりも、この前日の方を祝う人が多い。なぜ前日なのか、と言うと、みっちゃん曰く、『恋人の日』だからだそう。まったく、どんな根拠があつて、イブは恋人たちが愛をささやき合う日になったのだろうか。

「だって、イブだよ、イブ」

「だから？」

高校に入学したばかりの頃か。時期的におかしな話だったけど、私たちはサンタの話をしていて。話の流れでそうだった。

私の簡素な切り返しに、みっちゃんは、大げさに肩を落としてみせ、「わかってないなあ、つらはは」と呟いた。私は少し、むっとなつて、口を尖らせて言い返す。

「なにがよ」

「つらははまだ子どもだなあ、ってこと。それより、その口。かわいくないよ？」

「むう」

意固地になつて、さらに口を尖らせた。すると、みっちゃんの顔は歪み、腹を抱えて大声で笑い転げるのだ。

「あんだ、マジないね、その顔。すげー笑える」



そんなに笑わなくてもいいだろうに。私だって、いっぱいしの子高生だよ。みっちゃんほどじゃないけど、それなりの期待らしきものくらいあるよ。彼氏がほしい、とは思っていないけど、右も左もわからない新天地だけど、気になる人もいるよ。

ようやく笑いが収まったのか、みっちゃんはひいひい言いながら、頬杖をついた。

「知ってるよ。だから、サンタさんをお願いすればいいじゃない」

「……サンタさんて、私のこと馬鹿にしすぎじゃない？」

私が恨めしげに答えると、みっちゃんは「あれ？」と声を上げた。しばらく首をかしげ、「そっかそっか」と数度うなずく。置いてけぼりにされた感じがして、なんだかへそを曲げてしまう。

「なによ」

「いやさ、この街に住んでたらって思ったんだけど、あんた。電車で通ってたっけね」

私の家がある場所は田んぼだらけのド田舎に比べ、この街は少し都会。それでも、田舎であることに変わりはないのだが。

「そうだけど……」

「此処に住んでたら、サンタクローヌって単語はともかく、クリスマスって言葉はよく耳にするのさ。そらもう、大人から子供まで、この日は幅広い世代に支持されてる」

「この高校に通い始めてまだ少しかったけど、それは初めて聞く事  
実だった。」

「そりゃそうだよ。第一、よく聞くっていつても、12月しか出な  
い言葉ではあるし」

「そっか……。で？」

「ん？」

「気になるじゃん。サンタがどうとか聞かされたら」

私の疑問はもつともなはずだ。普通の神経を持っていたならば、  
ここまで聞かされれば、最後まで聞きたいと思っはずだ。

にやり、と口元を釣り上げたみっちゃんは、私の瞳をじっと見つ  
めた。何か、真烈なものを感じた私は、思わず背筋を伸ばした。

「もし、願いが本当に叶うとしたら？」

一瞬、意味がわからなかった。でも……すぐに頭が追い付いて、  
思考を促す。

「どづいづいこと？」

「ばかっている、と一蹴するほど、情報は得ていない。なにせ、願  
いが叶う、とは言っていないのだ。」

「この街ではね、クリスマスに願いが叶うといわないまでも、それ

に近い事象が必ず毎年、起こってる」

「なにそれー」

にわかには信じがたい話だった。大体、具体例の無い話だ。私が訝しげな表情をしていると、みっちゃんは笑った。

「ただ、願いがかなうかも、って話だから」

「そっか……。でも、仮にそれが正しいとして、何を願えと？」

私が聞くと、みっちゃんはやり、と効果音が出そうな笑みを浮かべた。

「知らない。自分で考えるもんだよ」

あれから結構経った。

今の私には、クリスマスの奇跡を、一蹴するなんて、できなかった。

とても、突拍子のないことなはずなのに。

「クリスマス、かあ」

三太に話しかけるみたいに、その言葉を発した。周りから見れば独り言でしかないのも、三太がいるからまだ平気だ。

そういえば、私のサンタさんは、いつ頃から来なくなったのだろうか。毎年のように、枕元に置かれていたプレゼントは無くなって

いた。お母さんはきつと、「サンタさんは子どもにしかプレゼントをあげないの」なんて、世迷言を口走るはずだ。何をおっしゃっているのです、母上殿。

サンタさんなんて、いなかっただじゃありませんか。

結局は、子どもの作った偶像でしかありえない存在だ。我が家にとって、サンタさんとは、大変仲のよろしい夫婦であった。

この事実を知った時、私は小学三年生だったか四年生だったか、もう覚えていない。ただ、あまりのショックに、涙を浮かべたことは覚えている。

その年こそは、と。一言お礼を言いたくて、寝たふりをして起きていた。

次第に眠気に負けながらも、何とか踏みとどまり、ついに部屋のドアが開く音が聞こえたのだ。やった！ と思い、そうつ、と開いた目に映ったのは、見慣れた二人の姿だった。

それからかな。

私はプレゼントと言うものに、感動を示さなくなった。嬉しいことは嬉しいのだけど、なんだか、違う。玉手箱を開けた浦島太郎の気分になったのだ。

「……………さむい……………」

商店街を抜けると、寒さはさらに勢いを増した。吹き込む風に、再び縮こまらせる身体。なにせ、目の前は海だ。地平線の彼方より

吹いてくる風が、身に凍みる。

本当に、何やってるんだろう。

「帰ろう……」

我がホームから歩いてきたのだ。そこその距離だ。普段は電車通学と言えど、あまり離れていないからできる芸当だが、さすがに寒すぎた。

踵を返し、商店街へと歩き出そうとしたその時、左手のリードが強引つ張られた。

「ちよ、ちよつと、三太」

ぐいぐいと、私を引つ張って浜辺へと誘う。本来ならなんでもない力なんだけど、この寒さの中、今の私の力は半分以下だ。血統書つき（たぶん）ゴールデンレトリバー（これもたぶん）の力には敵いっこない。

「待って、って、言ってるでしょ！」

ぐつ、とありつたけの力で踏ん張り、何とか三太の動きを止めた。また走り出すんじゃないかと、両手でリードをしっかりと持つが、中々三太は動きを見せなかった。

「ほんと、どーしたのよ、三太」

一点を見つめ、決してそらすことのない三太。隙あらば、と虎視眈々に走り出す準備を怠っていない。何を見てるんだらうと、その

視線を追うように、浜辺を見やった。

「え……?」

関係のない話だが『砂漠のバラ』は赤く無い。いくつかの化合物が寄り集まってできた、えっと、とにかく、茶色いのだ。

だというのに、この光景は、『砂漠のバラ』という言葉を連想させた。クリーム色が一面に広がる浜辺が砂漠。そして、ポツンと、その中でひときわ目立つ『赤色』がバラだ。

「……何、あれ?」

目を凝らしてみれば、それが人であることはわかる。わかるのだが、格好があまりにも異様だ。

まず、赤のワンピース一枚だということ。私から言わせれば、これだけの寒さの中、その姿ということだけで、ある意味犯罪者。服から伸びる手足は、綺麗な乳白色で、砂浜に溶け込む。

そしてなにより、少女の髪の毛は、白かった。もう、真っ白。腰まで届く長さだが、風に揺れて、舞い上がる。すると、下に隠れた赤いワンピースが顔を出す。けれど、すぐにまた髪の毛に隠される。

浜辺の色にまぎれ、赤色以外を判別できなかったのだ。

「え、つとお……」

この場合、あまり関らない方がいいだろう。怪しいし、奇怪だし、ワンピース一枚だし、白髪だし。

でも、寒そうに見えるのは間違いではないはず。両手を肩に持ってきて、自分自身を抱きとめるような姿からは、そう感じられる。

「うづうづ、しょうがない、よね?」

自問自答を幾度か繰り返し、仕舞いには口に出してしまっている。いや、今はそんなことよりやることがある。恥ずかしがるのは後々。

一步、私が足を踏み出すと、三太が一目散に駆け出した。私が動くのを待っていたのだ、その速度も、三太の最高時速だ。

「わわ、」

慣れない浜辺の上ではうまく走れない。それでも、速度を落とさない三太は、まったく。しつげがなっていない。飼い主の顔が見てみたい……って、私か。

「ひゃん!」

バサア。思いっきり砂浜に倒れた。って言うか、ひゃん、って……。

自分のあげた、情けない声にめげていた時、左手に違和感を感じた。そうっと、左手を上げてみると、あるはずの重みが無い。しまったあ!

ぱっ、と顔を上げ、正面を見やる。少女に何かあっては申し訳ない、と言うよりも、飼い主としての威厳が!

「す、すいませ、……あれ？」

三太は、今世紀まれに見るご機嫌なご様子で、少女の脚に擦り寄っていた。少女も、三太の頭を優しくなでている。三太の細ばった目からは、ご満悦、といった表情がうかがえた。

「あの一、」

声をかけると、少女は振り向いた。長い白髪が、ふわりとはねる。まだ、中学生くらいだろうか。幼いけれど、日本人形のような顔立ちは、整った鼻筋に、大きな瞳。全身から、美人の素養を感じさせた。さつきは、バラと表現したが、それが間違いであったと気付く。バラのような美しさではなく、百合のようなかわいらしさ。それが、この少女に抱いた、素直な感想だった。

「えっと、この犬の飼い主さん？」

発せられた声は、幼いながらも、はっきりとしたもので、聞いていて飽きない声とは、このような声なのだろうと直感した。

「あ、はい。すいません、うちの犬が」

「いえいえ。わたしも、一人で寂しかったし」

少女は、三太の横に座り込み、リードを掴んで差し出してきた。

「はい、びっぞ」

「ありがとう」



膝に手を乗せて、笑顔で答え、リードを受け取った。小さい子には、いつもこんな感じだ。近所の子どもたちの間では、一応優しいお姉さん、で通ってるくらいだし。

まだ三太の頭をなで続ける少女だが、かすかに肩が震えているのがわかった。やっぱり、寒いよね。

なぜそんな恰好なのか、という疑問より先に、首に巻いていたマフラーを解き、後ろから少女の首にかけた。振り返った少女は、困惑仕切った表情を浮かべる。

「あの……」

「いいよ、別に。いくらなんでも、その格好じゃ寒いでしょ？」

全然平気じゃないけど、目の前で寒そうにしている少女を差し置いて、私だけぬくぬくはできない。まあ、はじめからぬくぬく、ってほどじゃないけどね。

ついでに、ニット帽も脱いでかぶせてやった。目が隠れるくらいまで、めいっぱいかぶせると、少女はあわてて帽子を押し上げ、私を見上げた。

「……ありがとう」

思わず、心を奪われた。少女の顔に咲いた花は、元気いっぱいに満開で、綺麗だった。

「本当はね、少し寒かった」

「そりゃそうだよ。ワンピース一枚じゃ」

えへへ、と少女はマフラーを手繰り、顔をうずめた。脚も寒いだろうか、なんてのは気鬱だったみたいで、かがんでいる少女の足元には、しっかりと三太がまとわりついている。

「あつたかい……」

まるで、極寒の浜辺が、この世の天国であるかのように、幸せいっぱいな顔だ。私は、その場にしゃがみ、そんな少女と目を合わせた。私と目が合っつうれしかったのだろうか、少女はさらに顔を崩し、はにかんだ。

「えつと、名前は？」

「雪乃。日下部雪乃」

雪乃、か。名前を聞くと、髪の毛の白さは、降り積もった雪を彷彿させた。まだ、今年は降っていない。そういえば、初雪はそろそろだと、天気予報が言ってたなあ。

「ん？」

雪乃は、じいっと私の顔を見ていた。何かついてる？ って聞いても、首を横に振るだけ。どうしたのかな……あ、そうか。

「ごめんごめん。私は、園田氷柱。つららお姉ちゃん、って呼んでくれたらいいよ」

「そっかあ。じゃあ、よろしく。」 『つらら』

思いつき呼び捨てにされた。ここは、あれだよ。今後の人生のためにも、大人のマナーというものを教えてあげないと。

「あのね、雪乃。年上の人を呼び捨てにしちゃ悪いよ?」

雪乃はへへ、とはにかみ、三太の首に手をやった。

「わたし、たぶん年上だよ? つららより」

「うん、だから、呼び捨て……へ?」

立ち上がった雪乃は、お尻についた砂を掃って落とし、未だ座っている私を見下ろした。

「つららって、中学生?」

「しつれいな。れっきとした高校一年生だよ」

どこから見ても、中学生には見えないはずだ。それなりに化粧はしているし、服装だって、今日は大人っぽいものを着ている。

脚を曲げ、屈んでいる私に三太が擦り寄ってきた。雪乃が立ち上がってしまったから寂しいのだろうか。頭に手を置き、ゆっくりと数回なでてやった。

「ま、かわんないか。わたしはセブンティーン。高校に通ってたら、二年生に当たるのかな?」

降り注いだ声に、三太の頭の上で、私の右手は動きが止まる。い

や、固まった。ギギギ、と機械的な動作で、雪乃の顔を見上げる。太陽は出ていないため、逆光で顔が見えないということにはなかった。

「ともかく、年上を呼び捨てにしないのが大人のマナーなんじゃない？ なら、つららはわたしをなんて呼ぶの？」

してやったり、と口元を吊り上げる雪乃。

「……雪乃、ちゃん？」

「不正解、だね。『ちゃん』付けも、どうかと思うよ？ 馬鹿にしてるの？」

小悪魔的、とでも言うのだろうか。雪乃の浮かべた表情は、まさにそれだった。決して怒っている風ではなく、ただこの状況を楽しんでいるだけのようだ。

「あつと、えつと、」

「ぶっ」

私の困る姿は、お気に召したらしい。雪乃は声を上げて笑った。そこに、先ほどまでの大人びた印象は無く、容姿相応の笑顔であった。

「つらら、おもしろいね。別に呼び方なんてどうでもいいのに」

雪乃は、右の手を口に当て、くすくすと小刻みに笑う。私も、少しの間、むっとしていたものの、いつの間にか頬を吊り上げていた。

立ち上がると、三太は私から離れ、雪乃の足元へ歩み寄った。雪乃は、そんな三太にも、満面の笑みを向けた。

「この子、なんて名前？」

三太、と答えかけて、言いよどんだ。この場合、正式な名前を答えるべきかな？

「うん、とね……。笑わない？」

「うん？」

「そいつ、三太郎って名前なの」

園田三太郎。通称、三太。隣の家に住む中山さんのところに生まれた、三兄弟の末っ子だ。長男は一郎、次男は二郎ときて、なぜか三男である三太は、「三太郎」と名付けられた。生まれて一ヶ月ほどで、うちにやって来て、それ以来ずっと寝食を共にしてきたのだ（とは言っても、世話のほとんどは弟がしていた）。

「三太郎。三太、か……」

「変な名前でしょ？」

私もそう思うから、家族内で私だけが、あえて三太と呼んでいる。犬にだって、尊厳はあるはずだ。私も、つららなんて、みょうちきりんな名前をもらったから、気持ちはわかる。

「ううん。素敵な名前だと思うな」

だが、返ってきた答えは、意外なものであった。

「そう?」

「うん。三太って、なんだかサンタさんみたい」

明日はクリスマス。なるほど、雪乃はいい例えをする。どんなに変な名前でも、良い表し方をすれば、印象もがらりと変わる。まあ、誰もこなしつけの悪い犬が、プレゼントをくれるとは思わないだろうが。

「それにしても、」

「ん?」

サンタさん、だなんて。雪乃もまだまだ子供だね。

言おうとして、少し戸惑った。みつちゃん言葉があったからだ。神秘的な何かを、この街の人は信じている。言葉振りからして、雪乃だって例外ではなさそうだった。

「なにっ……くちゅん!」

不意に聞こえた、かわいらしくしゃみは、雪乃のものであった。マフラーにニットをかぶっているとはいえ、やはり露出している脚や腕が寒いのだろう。雪乃よりはるかに暖かい格好をしている私も、少し肌寒いと感じるくらいなのだから。

「ま、ともかく。雪乃、家どこ? 早く帰らないと風邪引くよ?」

「……やっぱり子どもあつかいしてる……」

「してないって。子供じゃなくても、寒いところにずっといれば風邪はひくの」

唇を前に突き出し、「むっ」と声を潜める雪乃は俯き、砂を眺めている。しばらくすると、顔を上げ、右手に見える白い建物を指差した。

「病院。ちょっと、病気でね。小さい頃から、ずっと入院してるの」

その言葉でまず思いついたのは、やはりというか、真っ白な頭髪だった。アニメとかマンガ以外では、まずお目にかかれない色。例え染色しているのだとしても、ここまでは綺麗に染まらないだろう。

「病気って？」

あえて聞かないという選択肢もあっただろうが、私は聞いた。と言うのも、自分からカミングアウトしたことだ。聞かないのは、逆に失礼な気がした。

「ほら、これだよ、これ」

右手を頭の後ろに回した雪乃は、その綺麗な白髪を掴む。私の考えは正解だったらしい。

「……その、白いの？」

「正確には、プラチナブランドって色。ま、ぶっちゃけどうでもいいけど。白でも、白金でも」

ぱつと放した右手から、こぼれる白髪は、よく手入れされているのだろう。しなやかに、元の鞘へと収まった。

「白蛇とか、ホワイトタイガーって、いるでしょ？ 生まれつき色素が足りなくて、ってやつ。わたしも、それ」

広げた右手を胸に当て、私を見つめる二つの瞳。紅色の瞳孔の周囲は褐色。普段見るものとは、明らかに違うそれに、私はたった今気がついた。

「アルビノ、って言うんだ」

その名には聞き覚えがあった。ついこの間、うちのテレビでは毎週かかっている動物番組で、そういう動物の特集をしていたのだ。白蛇やホワイトタイガーも、白いペンギンなんてのも、紹介していた。

「じつじつって、あんま好きじゃねえ」

そう言って、リビングでテレビを見ていた吹雪はソファから立ち上がった（吹雪とは、私の弟。年下の癖に、私よりも背が高く、生意気な奴。ただ、成績はかなりよくて、私の高校と同じ街にある有名私立高校に通うと豪語する、ばりばりの受験生だ）。隣にだらしなく座って、友達のメールを待っていた私は、目を携帯から放すことなく、「なんでー？」と口を開いた。単に、リビングに一人でいるのが嫌だったただけだ。

「姉ちゃんさ、嫌じゃね？ こんなの」



顎でテレビを指す吹雪は、苛立ちを隠そうともしていなかった。なんだかむかついて、「何が？」と疑問に疑問を重ねた。

「動物が。さらしもんみてえじゃん。こいつらだって、好きで色が無いわけじゃねえつつうのに」

「そんなこと言ったら、動物園の動物全部そうじゃない」

「違う、と吹雪は首を振った。

「他と違うからって、こんな風に取り上げられるのが嫌なんだよ。アルビノってさ、れっきとした病気なんだぜ」

その時、お気に入りのメロディが流れた。まだあんまり有名じゃないけど、私は大好きなバンドの曲。即座に携帯を開き、内容を確認する。やたら長い文面と、多数の絵文字を解読。どうやら、明日カラオケに行こうとのことだ。

「ま、姉ちゃんにはわかんねえよ」

そう言い残し、吹雪は自分の部屋へと戻っていった。そのときの私はと言うと、週末に歌えるかどうか、財布と相談をしながら、吹雪がいなくなったと気付いたのは、随分後だった。

「ワオンッ!」

すぐ傍で上がった咆哮に、肩がびくつと上下する。

「こらッ、三太……って、ちょっと!」

気がつくと、すでに三太は遙か遠く、浜辺の入り口付近まで走っていた。リードを引きずっているのを見ると、どうやら、私はいつの間にか紐を放していたらしい。

「待つて、三太！ 三太！」

……駄目だ。聞こえてない。

私たちに背を向け、疾走する三太は、きちんと行き先を考えているのか、はたまた適当にか。一度も止まることなく、視界から姿を消した。

「……どうしたの、あれ？」

事の成り行きを見守っていた雪乃が、呆然と三太の去った方向を見ながら、私に問いかける。私はというと、ため息を一つ吐いて、身体を思いつきり伸ばした。

「……時々あるんだ。放っておけば、そのうち帰ってくるから、気にしないでいいよ」

そう、時たまあるのだ。三太は、いきなり走りだして、どこそこを駆け回る。誰かに危害を加えることは無いから、そこは安心して居るけど、保健所にも捕まったら大変だと、内心はいつも冷や冷やしている。

「探さないの？」

「うーん、行く当ても無いしね。帰ってくるのを待つのみ、かな。不肖、うちの三太。しつ前は悪いが、頭はいい」

「……何それ？」

「うちの弟のキメ台詞」

キラーン、とかつこつける私に、はぁー、と。雪乃の口から大きなため息が漏れた。その紅色の眼光からは、哀れみや、呆れめいたものを感じる。

「ほら、わたしも一緒に探してあげるから。一緒に行こ？」

子どもみたいな体型の癖に、やけに大人ぶる雪乃の姿に違和感があったが、本当に私より年上らしいので、とりあえずは我慢しよう。

返答を聞かず、ずんずんと進む雪乃の後姿を見て、自然と笑みがこぼれた。早くー、と振り向き、雪乃は私をせかす。軽く手を振り、私は少し足早に。

肌色の砂浜は、真っ白い雪のように。踏み込むたびに、体に染み渡る。今思えば、雪乃との邂逅。私にとって青天の霹靂となる事実を印象付けるものは、唯一つの、そんな感覚だけだったのかもしれない。

ポケットから取り出した携帯を見ると、時刻はまだ二時ごろであった。だというのに、暗さはさらに勢いを増し、今にも雨が降り出しそうな曇天。

数歩分、私の前を歩く雪乃は、その名前の由来とも言えそうな白い髪を完全にニット帽に隠していた。後姿は赤一色だ。

「楽しそうだね、雪乃」

「うん、外歩くの久しぶりだしね」

振り向いた少女は、肌以外の全身を赤で染めている。私でも大きいかもしれない紅蓮のコートに、小さな体をすっぽりと埋め、ふわふわの赤い手袋、なおかつニット帽までかぶる。これも、赤い色。

コートポケットには、サングラスが入っているのが見えた。もしかしたら、親か誰かのものなのかもしれない。

返してもらったマフラーがずり落ちたので、鼻の辺りに持つてきて、口を開く。マフラーとの間に熱がこもり、口元は湿り気を帯びた。

「コートとか。手袋とか。あと帽子。あつたならなんで着てなかったの？」

浜辺の入り口に、申し訳なさそうに置まれ、ちょこん、と置かれていたコートを思い出す。しゅるしゅると、巻かれていた私のマフ

ラーをはずし、ついでに帽子も脱いで、はい。とわたしてきた。さすがに、寒さに負けそうになっていたので、かなり良かったのだが。防寒着があったなら、最初から着ていてほしかったものだ。体調を崩すかもしれないし、なにより、私が寒かったから。

「うーん、なんて言うのかな。こんな天気だし、いいかな、って」

「わけわかんない」

「そりゃそうだよ」

雪乃は、からからと笑った。雪の間から顔を出した花のように、健気だけれども、ひとときわ輝く美しさを放っている。やっぱり、この子には笑顔がよく似合う。

「でさ、どこ探す？」

紅い瞳が私を捉える。立ち止まった雪乃と同じく、私も出しかけた左足を戻した。

「うーん、さつきも言ったけど、ほんとに心当たりないんだ。いつも、ひょっこり帰ってくるからさ」

「じゃあ、お気に入りの場所とか、散歩でよく行くところとか」

「散歩、普段弟がしてるから。わかんないや」

三太の世話は基本、吹雪の担当だ。私はというと、時々思い出したかのように頭をなでてやったり、やりもしないお手を試してみたりしてるくらいだ。

「八方塞だね」

はぁー、と雪乃がため息をつき、吐息は白く濁る。一秒も経たずに消え行くそれを、目で確認ができなくなるまで、じっと追い続けた。

「雪乃は、」

「ん？」

「雪乃は、行きたいところある？」

「わたし？」

首をかしげる雪乃に、私は首を縦に振って、うん。と答える。

「三太探しって言っても、当ても無く探し回るより、行きたいところに行きながらの方が、楽しいでしょ？」

「そつだねえ……」

顎に手を当て、うーん、とうなる雪乃はやはりかわいい。とても年上には見えない。まあ、それを言ったら激怒するのだろうか。

微笑ましく心中で雪乃を愛でていると、おおっ、と雪乃の頭に電球が浮かんだ。いや、比喩だよ？

「公園」

「公園？」

反復すると、雪乃は山の方を指差した。

「あそこの丘の上に、公園あるんでしょ？ お姉ちゃんが前に言っていた」

「じゃあ、公園で」

「うん」

「やたー、と雪乃は手を上げて喜んだ。子どもだなあ、と思いつつも、かわいいので黙っておく。早く早く、と急かす雪乃に手をひかれ、私たちは公園を目指した。」

町で一番高いここは、いつもとまったく変わらず、街を優しく見守っている。私は、街との境にある、鉄柵に手をかけ、その風景を一望する。絶景、ってほどじゃないけど、十分に一つの芸術作品だ。

でも、私の口から出た言葉は、「綺麗だ」「や、「美しい」などではなく、ただ一言。

「……寒い」

勢いのある風が、私を襲う。咄嗟に目を瞑らなく手はならないほどの、強風。とても綺麗な反面、とても寒い。冬に来るような場所ではないのは明白だった。

さすがの雪乃も、……と思ったのだが、私の思い違いだったらしい。

「うわー、すっごいきれー」

目をきらきらとさせ、街の全貌を見渡す。そのまま落ちてしまいそうな勢いなのに、鉄柵を握る力は強い。ぎしぎしと、古びた柵から音がした。

「雪乃、危ないよ？」

「へーきへーき」

こつちを振り向きもしないで、雪乃は身体を左右に揺らしていた。よほどここに来たかったのだろうか？ それとも、何か特別な思い入れ？ て言うか、さっきから微妙に揺れる鉄柵が妙に気になる。危ないので、手を放しておこう。くるりと反転し、足元の石ころを蹴った。

「そーいえば、お姉ちゃんに教えてもらってたって」

「うん。けっこー前だけど、お見舞いに来た時にね。お姉ちゃん、都会の方に住んでるから。今日も、こつちに来てるよ」

都会、か。

自慢じゃないが、私はこの片田舎から外には出たことはない。家と此処を往復するだけで、それより先に足を伸ばしたことが無い。そもそも裕福な家庭ではないし、休日に旅行なんてありえない。欲しいものは大概、この街まで出れば事足りるし。



でも、行ってみたい。テレビでしか見たことがない高層ビルとか、芸能人とか。よく、田舎の方がいいってみんな言うけど、私からしたら大間違いだ。一度でも都会に住めば考え方は変わるのだから、出たことがないのだから。

「ねえ、つらら」

「ん、何？」

うつむいていたから気がつかなかったが、雪乃は鉄柵から離れ、私の正面まで来ていた。大きな紅色の瞳に吸い込まれそうになる。だからか。私は身体を一步分引いた。背中が鉄柵に当たる。

「クリスマスプレゼント、何がいいと思う？」

「プレゼント？」

「うん。お姉ちゃんに」

なんとできた子だろう。と、一瞬思ったが、そういえばこいつは私よりも年上だった。危ない危ない、ついつい頭をなでてしまうところだった。

「なんか。失礼なこと考えてない？」

するどい。私はポケットに手をつ込み、そ知らぬ顔で空を見上げた。なんとなく口笛を吹いてみる。

「ぜんぜん」

「ま、いいけどね。子ども扱いされるのはなれてるし」

わかってるじゃん。

「それより、何がいいと思う?」

先ほどと同じ質問。何がいい、と言われても、あいにく姉はいないし、弟にクリスマスプレゼントなんて買った覚えはない。特に意見もない私は、寒いので手は外気に触れさせず、首を横に振った。

「わかんない。なんでもいいんじゃないの?」

「それが結構ネタ切れで……」

その口ぶりから、毎年あげているのだとわかった。さっきの言葉ではないが、本当によくできている。歳が見た目と相応ならば、きっと先生に好かれるタイプだ。口は結構悪いが。

「手袋」

「去年あげたよ」

「ネックレス?」

「あまり高いのはちょっと……」

「ぬいぐるみとか」

「あの人には合わないね」

なにを言っても否定される。いい加減うんざりしてきたが、そういえば、とプレゼントにぴったりのものを思いついた。ただ、こんな日までいるかどうか。

「雪乃」

「ん？」

体を柵から放し、よっ、と前進した。しばらく進んで、後ろを向き、ちょいちょい、と手招きする。雪乃についてこいと促した。トテトテと効果音がつきそうな歩みで、雪乃がよって来る。

「思いついたよ、プレゼント。ついて来てはてさて。」

本日は冬休み真っ只中。さらに言えばクリスマスイブのイブ。会えると、いいな。

私の本当の目的を胸に仕舞い込み、私たちは丘を降った。

\*\*\*

「JJJ.....っ」

「そう、いい」

まあそりゃ、小首をかしげるものか。クリスマスプレゼントにぴったりのものを探しに来て、学校に辿りついたのだから。

眼前に聳え立つ、煤汚れた校舎。

此処は、私が現在通う学校だ。

「来て」

雪乃に目配せをして、奥へ入る。本当は、部外者は立ち入り禁止なのだろうが、ばれなければ問題ない。モーマントイ。

と、勢いよく中へ入ろうとした刹那、校門の脇に座りこむ巨大な何かを発見した。思わず声が出る。

「あ

「ん？ どうした……あ」

雪乃の口からも声が出る。

果たして、私たちの視線の先にいたのは歩きまわる発端ともなった存在、三太であった。

近づくと、その瞳は何かをとらえて離さないでいる。見れば、そこにいたのは猫だった。

犬猿の仲とよく言われるが、犬は猫とも相性が良くない。さながら、犬猫の仲とも言うべきか。もちろん、それは三太も例外ではなく、普段は猫なんて見つけたものならば吠えまくり、とても今のように適度な距離感を保ってなどいられない。

だと言つのに、三太は吠えるどころか、まるでさっきの雪乃の時のように、猫のそばにいた。猫も、これと言って気にする様子は見られない。

黄金の毛をした猫は、その蒼い双眸で私と雪乃を一瞥した気がした。

チリン。

猫の首に巻き付けられた鈴が鳴ったかと思うと、背を向け、去って行ってしまった。

「なんか、綺麗な猫だったね」

雪乃の言葉に頷く。

今世紀まれにみる美しい猫だった。もしかしたら、三太もそれを感じ取っていたのかもしれない。

「ああ、そうだ」

そこで、当初の目的を思い出した私は、猫の去った方角を見つめ続ける三太のリードを引っつきみ、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「つかまえたつと」

「はは、案外楽だったね」

本当に楽に捕まった。と言うよりも、なぜ三太は学校になんていたのだろうか？

私は、三太を此処へ連れてきたことはないし、ただの偶然のはず。でも、なにか、重大な意味があるような、そんな気がした。

「どーしたの？ つらら」

「ううん、なんでもない」

とにかく、いくらなんでも犬を校舎に入れるわけにはいかない。

リードをしつかりと、これでもかというくらいに校門の傍にある電柱にくくり付けた。

「親の敵のようだね」

「気のせいでしょ」

もう離れないと確信した時点で立ち上がり、校内に目を向けた。

「走るよ」

「へ？」

答えを聞くよりも先に、私は走り出した。

冬休み中と言えど、教師がいないわけがない。用務員だっている。

私はまだいいとしても、雪乃が見つかったら面倒だ。主に私の説明が。

ヒールでは走りにくいことこの上ないが、この際仕方ない。

一度も止まることなく駆け、目的地の少し前で止まり、後ろに振り返った。

「っはあ、は、」

「っすらあ、っ、疲れたよ」

正門からここまでの距離は結構ある。それこそ、五十メートル走往復分ぐらい。

「じゅめんね、じゅんじゅん」

そう言って、目の前にあった体育館を小規模にさせたような建物小体育館というらしいが、正直私たちの部活以外で使用しているという話は聞かない。に近づき、私はそっつと扉を横にスライドさせた。

中を見回す必要もなく、目標は見つかった。

いた。

黙々と、一枚のキャンバスに向かい、筆を走らせる青年。

私が所属する『美術部』部長の、センパイだ。

「あの人？」

私のわきから顔をのぞかせる雪乃に、首を縦に振って答えた。

「つららの、これ？」

生意気にも、雪乃は小指をおっ立てやがった。

一瞬、理解不能だった私だが、すぐにその意味を理解すると、ぶんぶんと首を横に振りまわし、否定する。

「ち、ちがうよ！」

耳が熱い。

顔も火照っている気がする。

ちがうと叫びつつも、ちがわないと心中で唸る。

確かに、雪乃の思い描くものとは違うだろう。でも、私個人からしてみれば、これはきつと、雪乃の考える感情と同じ。

私は、センパイに恋をしていた。

出逢ったのは四月、入学式を明日に控えた前日のことだった。

「うわぁ……」



おもわず声が出てしまったのは、今でも覚えている。無性に恥ずかしかった。見ず知らずの男の人、それもちよつと格好の良い人間の抜けた声を間近で聞かれたことが。

「あ、すいません！」

私の声に気が付いたセンパイが、こっちを見た。

至近距離からの視線に、胸が高鳴った。

センパイの眼。

センパイの手。

センパイの絵。

あらゆる「センパイ」という要素が、私を恋という落とし穴へ落したのだ。

「誰か、いるのか？」

体がこわばる。

そういえば、さっき叫び声をあげたばかりだった。この距離で、気が付かないはずがない。

そろーりとドアから顔を出し、はにかむ。

センパイは、私とわかったからだろうか、ふっ、と口元をほころばせた。

「園田か。どうした？　なんかわすれていったか？」

それはないだろう。私は苦笑した。

この少し小さめの講堂らしき場所を使うのは、今やこの学校でゼンパイと、私と同じく一年の美術部員の、一人のみ。高等部に美術の授業単位が存在しないから、結果として二人以外、此処に用事など無い。

「いえ、その、ゼンパイにお願いがあつて」

「んー、ちょっと待ってて」

しゃべる間も、ゼンパイの手はよどみなく動く。

ゼンパイのキャンバスには今日も、青空がいつぱいに広がっていた。

覗き込むように、ゼンパイの絵を見て、少しの違和感。

あれ？

なんだろう。なんとなくだけど、何かが違う。

ただ、その違和感の正体をつかむことはできず、そして雪乃がそこにいると言つこともすっかりと失念していた。

「あ、雪乃。ちょっと待ってて……っっておい！」

すぐ後ろにいるとばかり思っていた雪乃は、奥に飾られている絵の前まで移動していた。別に、センパイの描いた絵を見ることに異論はないのだが、そこらかしこ動きまわられて、センパイの集中力を乱してほしくなかった。

「さて、と。園田、とりあえず一区切りついたけど」

「あ、はい！ ほら、はやくこっちきて雪乃！」

慌てた私の口調が気に入らなかったのか、雪乃は盛大なため息を吐いて、歩み寄ってきた。

「はいはい、わかったわよ」

雪乃が私の横に立つのを確認して切り出す。

「えっと、この子は……」

「日下部」

「そう、日下部雪乃。ちょっと、センパイにお願いがあって」

中々名字が思い出せなかった私に、雪乃は助け船を出してくれた。でもさ、しょうがないじゃん。名字でなんて呼んでなかったんだし。

「お願いって？」

「デッサンを描いてほしいんです」

雪乃も、私が何を留意しようとしているのか代替の見当は付いて

いたのだらう。特に、これと言った反応は見せなかった。

「その子の？」

「はい」

はつきりと答える。

どんなプレゼントがいいか。雪乃の問いに対する私の答えだ。

普段、センパイは絵の具でキャンパスに絵を描いている。でも、時折「息抜き」らしく、私たちのデッサンを描いてくれるのだ。

経った五分ちよいで描いたとは思えないほど、精巧で、温かみのある絵。私は、センパイに描いてもらったデッサンを大事に保管している。

吹雪にも見せたところ、確かにうまい、と言っていたから、恋のせいで盲目に陥っているということはないだらう。

「へえ、お姉さんの誕生日プレゼントか。でも、俺なんかの絵でいいの？」

センパイの指示で椅子に座る雪乃に、センパイはスケッチブックを片手に聞いた。センパイ曰く、モデルは慣れていない人がすると結構きついのだそうだ。確かに、短な時間とはいえ、本人からすれば一時間ほどの長さを感じることもある。私の実験だ。

雪乃ははにかみながら「はい」とすがすがしく答えた。今日会ったばかりの私が言うのもなんだけど、なんとなく、よそいきの笑顔、

の気がした。

「飾ってあるのは、ここで描かれた絵なんですよね？ 私、生でこ  
ういうの見るのはじめてだから、でも、すごく感動しました」

これは本心だろう。雪乃の眼は、すごくいきいきとしていた。

「そっか……はい、完成」

シュツ、と音がしたかと思うと、センパイはスケッチブックから  
髪を一枚切りぬき、雪乃に渡した。私も見たが、すごい完成度だっ  
た。

センパイが普段「息抜き」と評しているのがわかった気がする。  
おそらく、これが本気のデッサンなのだろう。

鉛筆一本で、こんな表現ができるなんて。

淡く、儚く、手で触れれば溶けて消えてしまいそうな。雪乃の美  
しさを理解したうえで一枚。雪のように、可憐な花。

「……あ、ありがとうございます」

雪乃の奴は、本当に感動したようだ。私だって、あんな絵を渡さ  
れればうれしい。すこし、雪乃がうらやましかった。

「センパイ、どうもです」

「いや、いい息抜きになったよ」

両腕を目一杯伸ばして、センパイはあくびをした。悪い癖が発動中のようだ。

「また寝てないんですか？」

「ああ、今回はかしはな」

その時感じたのは、いつぞやセンパイから感じた感覚と同じものだった。

あれは、夏のこと。

ハル先輩が、センパイと話しているのを見つけた時だった。ちなみに、ハル先輩とは私の一個上の学年で、同じく芸術部に所属している人だ。歳のわりに幼い外見で、さらに性格まですば抜けていい。だからもてるし、センパイと二人で並んでいる姿を見るとお似合いですぎて、少し気後れしてしまう。二人は必死で否定してたけど……でも、なんとなく何かがある気がする。

「あの、部長さんの調子はどうですか？」

あれは、意味がわからない会話だった。

部長とは無論、美術部の部長のことのはず。だが、その部長はまさに目の前にいるセンパイその人だ。あきらかに、ハル先輩の言葉から、センパイ以外の「部長」の存在を感じた。

「ああ……この間も、騒いで怒られてたよ」

それは、初めて見るセンパイの顔だった。

無邪気な頬笑みを浮かべた、とても自然な顔。普段の凛々しさを残しつつも、あどけなさを感じさせる、魅力的な顔。

「もうしばらくしたら、ハルも会えるよ」

「……はいっ」

ハル先輩は本当にうれしそうに答えていた。

今、目の前にいるセンパイは、あの時と同じ雰囲気を持っていた。

「どした？」

「あっ、いえ。じゃあ、私はそろそろ……」

椅子から立ち上がろうとした直後、雪乃が声をあげて走った。

「私、ちょっと学校見てくるから、つららは待ってて」

「えっ？」

まさにデジャヴ。

うちの三太よろしく、雪乃は走り去ってしまった。

「って、見つかったら怒られちゃうよー！」

慌てると、センパイが「大丈夫」と笑って言った。

「え、でも」

「そりゃ少しはお叱り受けるかもだけど、あの絵をもってるや、俺関係だつてわかるだろうし、連れてきてくれるよ」

確かに、あれほどの絵を描く人なんて、思いつく限りセンパイだけだろうけど……。

「ま、用事があるならいいんだけどね。俺も、これ、完成させなきゃなんないし」

センパイが親指で指示した、製作途中の絵。

やはり、何かしらの違和感。それが何なのか、頭の先まで出かかっているのに、ちっとも出てこない。

「あの、」

だから、素直に聞いてみることにした。

「この絵、なんかいつもと違うような」

「はは、気づいた？」

でも、何が違うのかがわからないんですよ、センパイ。

「……ここまで、一年以上だ。やっとこさ、たどりついた……つてどこかな」

大きな達成感を帯びた双眸に、見とれてしまう。



一体、この絵には何が？

私は、もう一度よく絵を見てみた。

広がる、雲一つない青空。全てが単一な色ではなく、けど、それから全てで空だとちゃんとわかる。

雄大な草原、そして。

「あっ」

気づいた。センパイの絵を一年近く見てきて、なぜ気づかなかつたんだろう。

草原の上に、人が立っている。別に、構図自体は不思議ではないが、センパイが描いた、という前置詞付きで、やっと重大さに気が付いた。

改めて、美術室を見回す。

何枚も飾られているそれらは、ほとんどが賞を取ったもの。そしてそのすべては、空の絵だ。

だから、どこが違うかわかる。

今までのセンパイの絵には「登場人物」が一人もいないのだ。

「この人は？」

感じたことをすぐに口に出してしまふのは、悪い癖だとわかって  
いた。でも、今はそんな癖に感謝。だって、時間が経てばきつと聞  
けなくなる。

センパイは笑って答えた。

「そうだな……恩人、かな」

「恩人、ですか」

「それが、うん。一番妥当。彼女がいなかったら、俺たちはきつと  
今もまだ、鎖につながっていたままだったよ」

もう一度、絵を見た。

青空に向かって手を広げる、麦わら帽子の少女の、白いワンピースがはためく。後姿だけで、顔が見えることはないが、これがきつと、『部長』なのだと確信した。

「そう、ですか」

「うん」

センパイの顔が引き締まると同時に、再び手が動き始めた。作業再開のようだ。

「もう、聞くなっことかな」

ぼつりつぶやいて、私は反転した。

ドアへ一直線に歩き、振り返る。

さすがに、邪魔をする気にはなれなかった。

「どうしたの、つらら」

小体育館の入り口付近。外へ出たすぐのところに、セーラー服に身を包んだ親友こと、みつちゃんがいた。

「みつちゃんこそ。どつたの？」

「あー、はっは。部活にかまけていたせいで補習だ。ほしゅー」

眼鏡の奥の瞳が、少しにじんんでいた。大方、泣きながら宿題をさせられたのだろう。夏休みに同じような顔を見た覚えがある。

周りからはみつちゃんがしっかり者で、私を支えているみたいイメージが付いているらしいが、実際は違う。弓道部のエースのみつちゃんは、本当は泣き虫で、誰かが時々愚痴に付き合っていないければならないほどだ。

私は親友と言うポジションにつくと同時に、その役目まで仰せつかった。迷惑極まりないことだが、不快とは思っていなかった。だって、そんな関係が、私とみつちゃんの

「大変だね、みつちゃんも」

「はは、ほめるなほめるな」

いや、ほめてないから。

そこで適当に「一、三話を交わしていると、雪乃がこっちに歩いてきているのがちらりと見えた。校舎の方に行っていたらしい。

「あつと、悪いつらら。私は行かなきゃだから。それじゃ！」

「え、あ、うん。ばいばい」

軽く手を振り、その後ろ姿を見送った。

続いて、雪乃の方を見る。

「つらら」

「ん？」

「……なんでもない」

……雪乃の言いたい事は、なんとなくどころか、全部きちんとわかっていた。でもそれは、その事実は口にしない限り真実であり、だから、私は顔を背けて歩き始めた。

「さ、帰ろうか。雪乃」

逃げるように。

「そつだ。病室教えてよ。お見舞い行くよ」

言葉を重ねて。

「ほら、三太も。もう逃げるなよー」

ただ無表情に、先に行く。

\*\*\*

翌日。今日は、クリスマス・イブ。

私は病院にいた。

「206、206つと」

昨日聞いた部屋番号を繰り返しながら、廊下を歩く。

右手に見えるのは204号室。ならば、もうすぐのはず。

205を通り過ぎ、角をまがった先。

一つだけ、隔離されたような。そんな場所に、206号室は存在した。

二度ノック。

返事はない。

三度、ノック。

返事はない。

そつとドアをスライドさせ、中を覗き込んだ。

電気もついていない、カーテンも閉め切った真つ暗な室内に、雪乃はいた。

起こしたベッドにもたれかかるようにしている。暗さのせいか、表情はわからない。でも、そんな光景は私を不安に駆り立てた。

「雪乃っ」

「なに？」

「だ、……へ？」

案外あっさりと帰ってきた言葉に、啞然とする。

いやそりゃ、もうあっさりと。

「あー、早く閉めてもらってもいい？」

ドアに手を当て、立ちすくむ私に、雪乃が困ったような口調で話しかけた。

戸惑いながらも、「うん」と答え、ドアを閉める。

すると、さらに室内は暗さを増し、最早人がいるのなんて気配でしか感じられない。

「あつと、」

電気は？

そう聞きかけて、口をつぐんだ。

昨晩に、吹雪に聞いたことが頭に浮かぶ。

「……ねえ、吹雪」

「ん？ なに」

「前に、アルビノがどうとかって、話したジャン？」

「したっけ？」

「した。あんだ、詳しいの？」

率直に、知りたくなったからだ。

雪乃のことを、もっと、詳しく。友達だもん。当たり前だ。

「ま、そこそこにね。姉ちゃんよりは、確実に」

「人間、もさ。あるの？」

「らしい。つっても、世界にも少数らしいし、ほとんどは入院して  
るだろうから。会えることなんてないけど」

ということとは、私は超ラッキーガールということなのだろうか。

「アルビノって、色が白くなるだけなんでしょ？　なんで入院なんかするの？」

それは、ふと浮かんだ疑問だった。

だって、身体の色が白いだけなんだったら、体調自体はあまり関係ない気がしたのだ。

そんな私の疑問に、吹雪は真剣な顔で、首を横に振った。

「確かに、一般的には色が白くなることが目立つけど、違う」

「え？」

間の抜けた声だと思った。

それくらい、私は意表を突かれていた。

「違うの？」

「違う。アルビノはれっきとした病気だって、言っただろ？　色が白いってことは、黒色素　メラニンがほとんどないってこと。例えば、そう。白人って、皮膚癌になる確率が高いって知ってる？」

「う、ん。聞いたことある」

「白人よりも白い肌。実際、皮膚癌になる確率はその白人より何倍も高いんだって」



それが何を表わしているのか。

頭から、すっぽりとかぶった衣服の類。

うーん、なんて言うのかな。こんな天気だし、いいかな、つて。

雪乃の言葉。その意味。

曇天。

あらゆるキーワードが、頭の中で交差する。

結論なんて、とっくに出ていた。

「だから入院してるんだよ。無用な外出で、病気を患う可能性すら否定できないんだから」

吹雪の声が、頭の中で反芻される。

だから、雪乃の部屋は暗い。

なるべく光に当たらぬように。それは、自身の身を守るために。

私が何も言わず、入口のすぐ入ったところで立ち止まっているものだから、雪乃は不思議だったのだらう。でも、納得がいったのか、相槌をうつとりモコンを操作した。すると、室内に明かりがともった。

「ちよっ、雪乃っ」

「へーきへーき。此処の部屋は特別製らしくてね、原理は知らないけど、この電灯は肌に優しいことこの上ないんだって」

ちなみに、この服とか、あれも、割と特注。

そう言っつて雪乃が指差したのは、今まさにきているセーターと、掛けてある紅蓮のコート。昨日、頭にかぶっていたニット帽もセツトで置いてある。

そうか、そうだよな。

いくら曇天で、かなり薄暗かったとは言っても、何の準備もなく外に出るなんて、危ないことに変わりはないもの。

「あれ？　じゃあなんで電気消してたの？」

「気分。っつ言っつか、あんまり明るいところすぎじゃないんだよね」

「もう。そんなこと言っつると、性格まで暗くなっちやうよ？」

「大きなお世話です！」

べっ、と舌を出す雪乃は、やはり、年不相応にかわいらしくて。

なんとなく伸びた手は、これまたなんとなく雪乃の頭をなでていた。

「ちよっ、っつららー！　馬鹿にしてるっ？」

「してないよ。気のせい気のせい」

文句を言いたげな視線。でも、雪乃が手を払いのけることはしなかった。

それが私を気遣ったことなのか、ただなでられるという行為が好きだったのかは分からない。

それから、他愛のない話を何時間も続けた。

多く話したのは、やっぱり、みっちゃんの事かな。

私の持ちうる話の中で、笑いの要素を含むのはやはりみっちゃんが絡んできたときだけだし。

そんな私の話を、雪乃は一喜一憂しながら聞いてくれた。

雪乃の反応が嬉しくて、私はさらに饒舌になる。

携帯を確認すれば、時刻はもう四時を過ぎていた。昼過ぎにここへ来たから、三時間は話したのだろう。カーテンが閉め切られているせいで、時間の感覚がずれていたらしい。

「じゃあ、そろそろお暇しようかな」

そういった直後、部屋のドアが開け放たれる。

現れたのは、黒のレザースーツに身を包んだ、長身の女性。

綺麗とも、格好いいとも言える、思わず目を奪われてしまう、そんな人。

私も例外などではなく、うわぁ、と声を出しながら見とれてしまっていた。

「雪乃、お客様？」

「うん。って言うか、お姉ちゃん遅い」

雪乃の言葉振りから、目の前に現れたこの女性は雪乃の姉であることがわかる。

「確かに、似てる、かな？」

「おいそこ。なぜ疑問形だ」

雪乃の反論は置いておくとして、この二人、よく見れば似ているいや、身長とかは置いておくとして。

簡潔に言っ飛ばせば、お姉さんの幼いころが雪乃、見たいな感じかな。勿論、お姉さんは黒髪であって、アルビノではないらしいが。

「えっと、」

そんな折、お姉さんが私に声を賭けてきた。

呼びあぐねている所が、昨日の雪乃とダブル。やっぱり、姉妹なんだって実感する。

「えっと、園田氷柱って言います。雪乃さんとは昨日、お知り合いになりました」

とりあえず、馴れ初めと言つか、出逢った時の話をした。

雪乃は恥ずかしそうに、頬を膨らませつつ。お姉さんは微笑を浮かべながら。私の話しを真剣に聞いてくれた。

「あ、そうだ」

そこで、雪乃が唐突に言葉を紡ぐと、「はい」と無造作にラッピングされた用紙を手渡した。昨日のデッサンの事だと、すぐに見当が付く。

「一日早いけど、はい。メリークリスマス」

お姉さんの表情に驚きは少ない。けれど、確かな喜びを見た。毎年もらっているのだろうが、やはり、嬉しいものは嬉しいのだ。

「ありがとう、雪乃」

少しの談笑。

「あ、そうだ」

そういうと、お姉さんは机の上にほたられていたりモコンに手を

伸ばし、テレビを点けた。

「また料理番組？ 出来もしないのに」

「うるさいわよ」

そんな二人の光景を微笑ましく見ながら、ほっと息を吐く。

もうしばらく、この光景を見ていてもいい。ニコリとほほ笑んだ。

時計を見るに、番組は四時半からのものらしい。

今はその前の段階、ニュース番組。

ぼうつと眺めていた。キャスターの声が耳に届く。

少し前、この街であった事件の被告人の写真が、映し出される。

よくある、いつでもみれるようなニュース番組だった。

料理番組を楽しみに待つお姉さん。そんな姉をやれやれとみつつも、楽しそうな雪乃。

そんな二人を前にした私はただ、痛烈なまでに、ひどい 吐き  
気に襲われていた。

『 続いてのニュースです。……半年前、殺害された櫻井亜美さんの』

「じじじっ。」

料理番組が始まる前にある、おなじみのニュース番組のつまらなさ、わたしはふと、つららの方をみた。ひどく、歪んでいる顔。声をかけると、つららは無表情になって顔を少し上げた。

正直、怖い、と思う。身体が自然と後退した。

「じゃあ、私帰るね」

「え、あ、う、うん」

唐突に放たれた言葉。

無表情というより……コンクリートにでも固められたかのように、堅く、冷たい表情だと思った。

何かわたしは、彼女の気に障る事をした、あるいは言ってしまったのだろうか。不安になる。

友達を失いたくなんてない！

……わたしは、心で思ったことを直接出せるほど、強い人間ではなかった。

だから、なにも言えない。

去っていく背中に、言葉をかけられない。

「っ、つらら」

細くか細い声は果たして、彼女の耳に届いたらしい。

振り返るつらら。映る横顔。

うつろな瞳に、乗り出した身体がまた下がる。

「なに？」

別に不思議な言葉じゃない。でも、奇異だ。

言葉に覇気がないなんて、レベルじゃない。

生気が感じられない、とでもいうか。

そう、心ここにあらず。まさにその通り、つららは外見だけを此処に忘れていってしまったのではないだろうか。そんな、くだらないことを考えた。

「ううん。また、ね」

つららは病室を出て行った。

去り際に見せた笑顔は笑顔なんかじゃなかった。まるで、お面の



ような。

意味がわからなくなって、やっぱり自己嫌悪に襲われて。

涙が唐突に押し寄せてきた。

一体、どうしたと言っただ。

「雪乃」

両手で顔を覆う私に、お姉ちゃんの声が届く。

「雪乃」

言葉は、出ない。

\*\*\*

寒さに、瞼をこじ開けた。眠りついたのが遅かったからか、眠気が一気に晴れる、ということはない。

カーテンを開け、そこから見える景色は、昨日となんら変わりない病院の中庭。

今日はクリスマス。キリストの誕生日。世間一般で言うには、恋人の日。

なんて、そんなひねくれたものの見方しかないから、友達がい  
ないんだって思う。

でも……一昨日は我ながら、大胆な事をした。誰かが声をかけて  
くることが事態が予想外だったため、成り行きに身を任せた結果、自  
信を持って友達だといえる関係を、つららと作れたと思う。僅かな  
時間、一緒にいただけではあるけれど、はっきりと言える。常のわ  
たしなら、きつと自ら退いて、そこまでいたれなかった。クリスマス  
ス・ファンタジア。二日も早かつけど、わたしにとってつららこそ  
が、クリスマスの奇跡だった。

だけど……

「うんっ。このままじゃ、駄目だ」

昨日見た、あの凍った顔。

何かしらの予感があった。そして、純粹につららの助けにもなり  
たいと思った。つららは、わたしの友達なのだから。

「あら、もうおきてたの？」

と、姉が病室に現れた。姉さんはこっちへ来ているとき、大抵は  
病院で寝食している。

「うん。出かけてくる」

「……あまり、外出は好ましくないんだけどなあ」

姉さんはそう言って苦笑した。……昔は必死で止めてきたものだけれど、最近はめっきり。

わたしはこの体質のせいで、長くは生きられない。それは生まれながらずっと言い聞かされてきたことで、納得している。けれど、ならば今を存分に生きたいと思っていた。

そのことは、姉さんには真剣に伝えた。病院で暮らす事は納得する。でも、監禁されたくはない。

わたしも姉さんも、他に家族はいない。だから姉さんのわたしを大事にしたい気持ちは痛いほどわかるけど、でも、違うんだ。

「遅くはならないようにするよ」

心配そうな瞳の姉に、ただわたしは、笑顔を向けた。

訪れたのは昨日も来た、つららの通う学校だ。どうやら、中学と高校をひとくくりに行っているようで、校舎が大きく二つに分かれている。

わたしは少しこじんまりとした方　おそらく高等部だろう方向に足を向けた。目指すは、あの小さな体育館。

つららが想いを寄せていたセンパイ（はつきり言っただけだ）だったが、何かつららの事を知っているのでは？　と思った。

そうっ、と横開きに扉を開けて、中に目を走らせた。鍵が開いて

いたという事は、誰か居るのだろうけれど、あいにくと人の影は見当たらない。出かけているのだろうか。

と、昨日センパイが書いていたあの絵が奥に並べられているのがわかった。代わりに、部屋の人がいた形跡を残すあたりには別の絵が立てかけられている。

「違う人、だよな」

素人目にも、センパイがかいたものとは思えなかった。別に下手ではなく、うまい方だけれど、センパイの絵を見たときほどの感動がない。

「……あの」

そもそも、構図も有り触れたものだし。うーん、やっぱり微妙な絵だ。

「ちょっと、いいかな？」

「はい？」

声がしたので振り返ると、そこにはなんとまばつとしない顔をした青年が立っていた。

髪の毛は清潔に切られていて好印象だけど、やる気のない瞳だとか、猫背気味の姿勢だとか、総合的にはあまり良い印象を抱けない。

「えっと、」

「あー、とりあえずどいてもらっていいですか？ 中入りしたいんで」

「え？ あ、はい。すみません……」

素直に頭を下げて、道を譲る。すれ違いざまにわたしを一瞥して、青年は中へ入った。わたしも続いて入り、ドアを閉める。

「おい、なんで君まで入るの」

少し怒っている気がしたが、仕方がない。

「寒い」

それ以外に理由があるものか。

それに、この部屋の住人らしいこの青年はきっと美術部員。つらの事を知っているかもしれない。

「……まあいいや。どーでも」

なんとも無気力に答えた青年は、キャンバスの前に腰を降ろすと、買ってきたらしい小さめのペットボトルをコンビニ袋から取り出すと、キャップをあけて口をつけた。湯気が立っていることから、ホットだという事はすぐにわかった。

「……なあ、なんか用事？」

青年は絵に手をつけることなく、身体をこちらへ向けた。色々無気力で、何事にも動じない印象があったが、どうやら人がいると集中できない性質らしい。証拠に、視線はちらちらとキャンバスに向

かっている。かきたいのだろう。早く離れた方がいいかなと、わたしは手身近に用件を伝える事にした。

「実はっ……くちゅん！」

そこで鼻に、寒さからツーンとした感触。これはまずいと思った次の瞬間にはくしゃみは出ていた。

「……あー、寒いわな。ほら」

「わっ」

と、青年は先程自分が飲んでいたペットボトルを投げて渡してきた。そんなに距離が無かったとはいえ、突然の事だったので取り落としてしまう。

「これ、」

間接キス。そういおうとおもったけれど、青年はまったく気にしていないようだったので、こういうことには無頓着なんだなど、言葉を飲み込んだ。

ホットレモン袖グレープフルーツ。ミックスのしすぎは駄目だと思う。

とはいえ、掌から伝わる熱の魅力には抗えない。キャップをはずして、口に含んだ。

「あ、おいしい」

以外や以外、中々美味だった。

「よかった。……で？　ここになんか用事？　あいにく、先輩ならはずしてるけど」

「あ、はい。その、園田つららさんって、此処の部員ですよね？」

つららの名前を出したところで、青年が少し苦しい顔をしたのを見逃さない。この青年は、やはり何かを知っている。

「園田が、どうかした？　また迷惑でもかけたか？」

「また？　それって、どういう意味ですか？」

青年の顔がしまったと、苦いものとなる。ただ、喋ってしまったものはしょうがないと思ったのか、それともわたしの真摯な想いが通じたのか。ゆっくりと、口を開く。

「……夏休み明け頃、いや。九月半ばだ。『変な人がいる。お宅の学生じゃないか』って、学校に通報があったらしくてな」

\*\*\*

公園に、つららはいた。昨日わたしが手をかけていた柵に体重をかけているようで、街を見下ろしていた。

『園田なら、公園だろ。あいつはあそこ、すげえ想いいれがあったみたいだし。……最近は、毎日いるぜ』

彼も、つららの事を心配してるのだろう。当たり前だ。

先程の話を聞いた限りで、彼女の心配をしない人はいない。良い意味でも、悪い意味でも。青年はきつと前者。殆どの方は、たぶん後者の意味で。

「つらら

言っと、つららは焦って振り返る。わたしと目が合う。驚愕に、  
瞼が押しあがったのが見えた。

「雪乃……」

「わたしのさ、思い過ぎだったら良かったんだけどさ。どうも……  
…そういうわけでもないみたいだね」

確かに、納得のいく真実だった。昨日わたしの感じた違和感も解消できる程、納得のいく。

同時に、つららがわたしと接点をもった理由も、説明が出来る気がした。そこに理由があったと考えると、とても哀しい事だけれど。

「何か、用？ 今日、お見舞いには行かないよ」

「今会ってるからいい。用……なのかな。わかんない。ただのおせつかいだって、自分であきれちゃう」



「……」

わたしが、日下部雪乃は全て知っている。そう勘付いたのだろう。つららの表情に警戒の色が表れた。

心苦しい。真実を伝える事。それが、こんなにも重いものだなんで。

「サクライアミさんは、もういない」

「っ、……」

「昨日、おかしいって思った。体育館から出てきてすぐのつらは、遠目からだけど、あきらかに誰かと喋っていた。一人でいる人と、誰かという人。雰囲気の違いぐらい、誰だってわかる。……隣に誰もいなかったことくらいだよ。おかしかったのは」

「いた、よ？ 雪乃はタイミングとか立ってた位置とか悪かったんだって。だって、みっちゃんが現に」

「いなかったよ!」

「っ」

「いなかった」

わたしはつららの周囲一メートルぐらい、余裕で確認できた。そのわたしがいないっていうんだから、いない。

「ねえ、つらら」

「雪乃」

わたしの言葉よりの早く、つららが口を開いた。瞬時に、わたしの唇は閉ざされてしまう。

「それが何？ 私をどうしたいの？ そんなにつ、傷つきたいの？」

つららは泣いていた。瞳から、大粒の涙が頬を伝う。

泣かせたいわけじゃない。でも、違う。今のままでいることが、つららの幸せだなんて、わたしには思えない。どう考えても、思えない。だから言う。口にする。つららとサクライアミの、真実を。

「みつちゃんは、死んだって」

「わかってるよっ！」

つららの大きな声の反動で、周囲の音が全てなくなった錯覚に陥る。乾いた空気が、つららの声を何度も反響させた。

「わかってる！ でもいいじゃない！ 誰にも迷惑かけない！ 私が、みつちゃんと会ったって、誰も困らない！」

「困るとか、困らないとか、違うよ。わたしは、」

「違うっ？ 意味がっ」

ダンっ。

つららが柵を大きく叩いた。嫌な予感が、嫌な音で増幅された。乾いた音が響く。柵が、その一度の衝撃で壊れたのがわかった。

「あっ」

間抜けなわたしの声。動けない自分かもどかしい。つららは今にも落ちそうな身体を、バランスを取ってなんとかとどめていた。でもそれは、一瞬の間にも満たないはず。

たった今、この瞬間のつららの顔が、わたしの足を地面に縫い付けていた。怖いとか、恐れ表情の裏に、悲しみの果ての無表情があった。

『雪乃、あぶないよ?』

昨日のつららの言葉。つららは、わかっていたはずだ。鉄柵が古びていた事も、壊れそうだった事も。

もしかしたら、つららはこうなる事を望んで わたしの足は、まだ動かない。

「あ」

つららの身体から、力が抜けた。そのまま、身体は傾いて、

「園田!」

と、男の人の声が聞こえ、わたしの横を風が通り過ぎた。大きな背中。でも、わかる。あれは、昨日体育館にいた美術部の部員だ。

「ばか、やるじー！」

間一髪でつららの手を取った青年は、つららの身体を引っ張って一緒に倒れこんだ。背中を大きく打ちつけたらしい。つららの身体の重さも一身に受けたせいで、顔が歪んでいた。

「あ、っあ、ごめ、ごめん」

「てて……いや、いって。それよりどけ、重い」

何気にひどい事を口にした青年は、半ば無理やりつららの身体を放り、立ち上がった。

「重いつて、……相沢ひどくないっ？ 仮にもジョシコーサーに！」

「命救った相手に何言ってるんだ！ そのぐらいいいだろ！」

「よくない！ 大体、相沢はいつもいつも私のこと無碍に扱ってばっか！ 少しはセンパイを見習え！ ばーか！」

目の前で口論……というか、ただの言い合いを展開され、わたしの目が点になったのがわかる。というか、さっきまでつららが自殺する気だったとか、そんな考えさえ一蹴されてしまう。

「……つぶ」

思わず噴出してしまった。でも、うん。

覚悟、ってわけじゃないけど、言いつらいと思ってたことが今ならばすらすら言える気がした。

「つらら、っ」

でも、口を次いで言葉が出るよりも早く、わたしの体が反応した。地面に座り込んでいたつららの胸に飛び込む。

「雪、乃？」

「……生きてて、よかった」

ただ、それだけ。言いたいことも、言わなくちゃいけないこともあるけれど。

いまはただ、その事を伝えたかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6571z/>

---

サンタクロースの見つけ方。

2011年12月24日07時45分発行